

令和8年度第2回生駒市関係人口施策検討会 会議録

開催日時 令和8年7月30日(木) 9時30分～16時15分

開催場所 生駒市内

出席者

(参加者) 佐藤座長、井上氏、河尻氏、坂本氏、高津氏、高橋氏、棚橋氏 (五十音順)

(事務局) 小紫市長、鍬田経営企画部長、村田公民連携推進課長、大垣公民連携推進課課長
神所公民連携推進課ふるさと応援係長、高山公民連携推進課ふるさと応援係員

議事内容

- 1 開会
- 2 フィールドワーク
- 3 意見交換・振り返り
- 4 その他
- 5 閉会

以下、発言要旨

1 開会

2 フィールドワーク

1) 伊藤氏

地域食堂「たわわ食堂」やフリースクール和草、民泊「しおのめハウス」の取組について聞き取りを行った。

2) 藤井氏

日替わりカフェ「ヒロミメシ」、自宅料理教室や1日1組限定の自宅レストラン、マルシェの取組について聞き取りを行った。

3) 勝山氏

音楽や食を媒介に人が集まるイベント「Musina」の取組と転入の契機について聞き取りを行った。

3 意見交換・振り返り

【座長】 フィールドワークでは、生駒市内で場や活動をつくり、地域との関係を広げている3名の方からお話を伺った。印象に残ったことや意外だったことを、一人3分程度で

共有していただきたい。

【参加者】 生駒に対しては、ベッドタウンとして比較的均質なステレオタイプな印象を持っていた。古くからの家や地域ごとに異なる景観があり、個性的で印象に残る活動をしている人がいることを確認できたことが、訪問前後での大きな印象の違いであった。「その人にしかできない」「あの人だからできる」と見られてしまうことは、周囲にいる人の可能性に蓋をすることにもなり得る。個性的な人の力をさらに生かしていくことと、尖った人にしかできない活動にしないことの両方が重要で、その二つを両立させる仕組みを、どのようにつくるのが大事な論点になると感じた。また、転入前から地域の人との交流があったことが、きっかけになる人もいた。地域と関わる前段階にある「クッション」のようなものを、どのようにつくるのかも関係人口を考える上で重要ではないか。

【参加者】 改めて、関係が成立するためには、関係を持ちたい人と、関係をつくろうとする人の双方が必要だと感じた。話を伺った人々は、生駒の中で主に関係をつくる側にいる人であり、それぞれの周囲に人や活動の集まりを形成していたが、全ての人とその役割を担えるわけではない。共通していたのは、関係をつくることに前向きで、積極的で、それが自分や地域にとって必要だと考えていることである。こうした人たちと行政がどのように接点を持つのが重要である。もう一つ、それぞれが場や活動を持っていた。小さなイベント、自宅を開く活動、さらに物理的な拠点の運営など活動の段階には違いがあるが、物理的な場を持った後は、活動者自身がその場から離れられることも必要である。本人がいなければ人が来ないという状態では、新しい活動に挑戦することが難しくなる。関係をつくりたいと考えている人を育成できるかは分からないが、既にそういった意思を持つ人がいるのであれば、その活動を促進することは関係人口を増やすことにつながるだろう。一方で、「関係が増える」とは何を意味するのか、整理する必要がある。受け入れられる人数や規模には一定の閾値があり、大きな集団を求めているわけではないと感じた。しかし、このような人が地域に多数存在する状態が、結果として関係人口が増えている状態になるのではないか。

【参加者】 今回の視察先は、山間部、住宅地の自宅を活用した場所、駅前という三つの異なる地域や立地が、意図的に選ばれていたと思う。それぞれの活動者が、自分の住んでいる地域や活動現場において、何が必要なのかを考え、必要性に対応する形で活動していた。行政が上から主導するより、現場の人が地域ごとの課題に対応していく現在のあり方の方が、関係性は広がりやすいと感じた。私の知る地域などでは、活動や地域を持続させることが難しいという前提に立ち、どのように活動を畳むか、終わらせていくかの発想になりがちである。しかし、今回の人々は今をいかに面白く、充実させるかに焦点を当てて、活動や考えを展開していたことに可能性を感じた。

【座長】 率直に二つのことを感じた。一つ目は、話を伺った女性たちが、利益や効果、活動の継続を強く意識するというより、「自分がこうしたい」「このようなまちになってほしい」という思いから活動していたことである。自分の考えを率直に言葉にし、実行できること、その背景に家族の協力や理解があることも印象的であった。二つ目は、場の確保についてである。これまで、生駒には外から来た人が引っかかる場所が少ないのではないかと考えていたが、何らかの「クッション」があれば、強い関心を持つ人は地域に来てくれることが分かった。市内に小さくてもコアなグループが複数できれば、それらが関係人口の基盤になるのではないか。大きな施設を整備するよりも、小さな活動拠点や常設利用できる場所の情報提供、地域のイベント情報を発信しやすくすることが必要である。ただし、行政が先に枠組みや支援内容を決めると、順序が逆になる。活動者から要望が出た際に、それに合う支援を探す程度の、緩やかな関わり方が求められると感じた。

【参加者】 今回話を伺った人々に共通していたのは、活動や事業を大きくしたいという志向があまり見られなかったことである。以前勤務していた地域で出会った活動者とはタイプが異なり、生駒の活動者は、よい意味で肩の力が抜けており、自分のやりたいことを続ける中で現在の地点にたどり着いたのだと感じた。こうした姿勢は、生駒らしさの一つかもしれない。また、生駒では活動への入口のハードルが高く、一人で訪れてすぐにつながることは難しい。一方で、簡単にはつながれないからこそ、実際につながったときの特別感や喜びがある。このような、生駒のコアな部分を体験できることや、活動の一員として役に立っていると感じられることは、関係人口にとって魅力や行政は、入口を直接つくるというよりも、関わり始めた人をその後どのような関係につなぐかという部分で役割を果たすのではないか。移住する人だけでなく、生駒の魅力を周囲に伝える人など、多様な関わり方を見極め、何かをしたいと思ったときの受け皿として支援することが、市の役割ではないか。

【参加者】 南生駒に宿泊し、周辺を散歩しながら生駒山の写真を撮っていると、通勤途中の女性から「生駒山は見る時間によって全部色が違う」と声をかけられた。この出来事から、生駒山が暮らしに根付いた存在であることを実感した。また、多くの人が「生駒は住みやすい」「よいまちだ」と話しており、住みやすさへの愛着の強さが印象に残った。総務省が関係人口施策を進める背景には、人口減少や空き家の増加といった課題があるため、生駒には必ずしも同じ文脈は当てはまらないかもしれない。しかし、新しい人との出会いは、地域で暮らす人自身の可能性を引き出し、人としての豊かさにつながる。そのため、生駒では移住促進よりも、新たな人との関わりが生まれるきっかけづくりが重要であり、人と関わる入口をつくることが行政の役割の一つではないと感じた。また、「いこまち宣伝部」は、生駒に対する解像度が高く、人や活動をつなぐ力を持つ貴重な存在である。現役・OBを含めたネットワークを生かし、市内外の人をつなぐ役割をさらに発揮できる可能性があると感じた。さらに、ゲストハ

ウスなどの宿泊拠点も重要である。地域に泊まれる環境があれば、夜まで交流を深めやすくなるため、多様な人が関係を築くための宿泊拠点の充実も検討に値すると考えた。

【参加者】 いずれの活動も、自分の生活や問題意識を起点とした「自分ごと」から始まっていた。また、誰でもよいから多くの人に関わってほしいというより、量よりも質を重視し、価値観の近い人との関係を求めているように感じた。私自身も、U ターン後にいこまち宣伝部へ誘われたことをきっかけに地域と関わり、多くの面白い人や活動に出会うことができた。この経験から、市外の人との関係づくりだけでなく、市内に住みながら地域の活動や人を知らない層に目を向けることも重要だと感じる。いこまち宣伝部のような活動者と、何かを始めたいと思いつきながら動き出せていない人をつなぎ、その関係や対象範囲を整理できれば、新たな仕組みにつながるのではないかな。

【事務局】 長時間の視察と議論に感謝する。第1回から、生駒のような住宅都市でなぜ関係人口を議論するのかという根本的な点について議論いただき、考えがかなり整理された。生駒市は、市制50周年までは住宅都市としての同質性を生かして成長してきたが、今後は、その中から新たな個性を見出し、異質なものを取り入れることで、次の成長につなげる必要がある。これまで、楽しみながら新しい活動に取り組む人を増やしてきた。一方で、活動者だけでなく、まだ一步を踏み出していない人が、市内外の新しい人との出会いを通じて動き始めることも重要である。

人、場所、イベント、情報など、さまざまなものが地域との中の「クッション」になり得る。市民活動やまちづくりに限らず、創業支援や農業なども含め、市民の「何かをしたい」という思いを掘り起こし、そこに関係人口となる人が交わることで、既存の活動がどのように広がり、加速するのかを考えることが重要である。今後も皆さんの意見を伺いながら、生駒における「住宅都市型の関係人口モデル」として具体化していきたい。

【座長】 3名には共通する部分がある一方で、それぞれ異なる立場や考え方もあり、大変参考になった。このような人たちは、生駒市にとって大きな財産である。生駒市における関係人口については、地域課題を外部の人に解決してもらうのではなく、市民と市外の人が「一緒に楽しむ」ことで、市民の活動や地域の魅力を高めていくものとして捉えられるのではないかな。シティプロモーションとも連携しながら、生駒の楽しさや面白さを発信し、人をつなぐ取組を考えていきたい。第3回検討会で引き続き行いたい。

4 その他

【事務局】 （事務局から今後のスケジュール説明）

5 閉会